

原典で読む 外国人が見た日本



高橋知明

(瀬田玉川神社禰宜・公益財団法人
鎮守の森のプロシエクト事務局次長)

第五回 □バート・フォーチュン 『幕末日本探訪記』

今回は、イギリスの植物学者でプラントハンター、そしてイギリスの紅茶文化の発展に貢献したことで知られるロバート・フォーチュン(一八一二—一八八〇)を紹介します。プラントハンターとは、交通や情報網が飛躍的に拡大した十九世紀に、ヨーロッパで未知だった植物の採集を目的として、世界各地を舞台に活躍した人物群のことです。

フォーチュンは、桜田門外の変で大老井伊直弼が暗殺された年、その災異も起因して改元された万延元年(一八六〇)とその翌年の二回にわたり来日し、珍種の宝庫とされていた日本での植物採集を試み、江戸(市中、近郊)、神奈川、長崎

などを調査。その途上で様々な植物と日本の多彩な文化に触れ、それをこと細かく記録しています。

最初に長崎に来た彼は、日本人がともも花を愛する民族だと感じていました。

「住民のはつきりとした特徴は、身分の高下を問わず、花好きなことであった。良家らしい構えのどこの家も、一様に裏庭に花壇を作って、小規模だが清楚に整っていた。この花作りは、家族的な楽しみと幸せのために大変役立っていた」

当時は、花を愛好して育てるのは貴族というのが世界の通例でした。

彼は日本の中流以下の民家や商店の庭を覗いて花壇や盆栽の観察もしています。



□バート・フォーチュン

ことが窺えます。

さらに、彼は日本の風景にも大きな感動をしています。江戸から長崎に向かう途中の瀬戸内海を通った時のこと。

「眺望の主眼は、奇異で空想的な丘や谷間、岬々たる岩石など、それらの人工を加えない野生のままの自然の風景にある。讚美した入り江に沿った町や村に相対して、われわれ小人数の一行の一人ならず、この美しい『内海』の海岸に日向ぼこでもしながらこの海辺に住み、そして『林間の隠者』となつて、そのような風景の中で余生を送りたいと、口をそろえて言う」

「そのような風景の中で余生を送りたい」なんて、最高の賛辞ですね。

ところで、彼が日本で成果を得たかった最大の目的はなんだったのでしょうか。

「私の目的の一つは、イギリスの在来品種のアオキの雌木のために、雄木の品種を手に入れることであった。これは恐ら

「その辺でよく眼にふれた植物は、ソテツ、ツツジ、それと私がシナからイギリスへ移植したものと同じ種類で、小形の美しい竹のほか、松、杜松、イチイ、マキ、ラカンマキ、観音竹、羊歯類などである。とにかくこれらの庭は、労働者の庭として特筆に値すると言つてよいだろう」

長崎の後、神奈川に滞在した彼は、新たな発見をします。

「傘松と呼ばれる立派な目新しいマキに出くわして欣快に堪えなかった」「この立派な樹木がはたしてイギリスの気候に耐えられるかどうかは、さらにわれわれが実際に経験してみた上でなければ、何とも言えない。しかし、もしそれが可能であったとすれば、イギリスの鑑賞用松類の目録には、大きい掘り出し物である」と。

大きい掘り出し物とまで言った立派な樹木とはコウヤマキのことです。今では悠仁親王殿下のお印としても有名ですね。

彼はイギリスのオールコック公使の招きで、日本で最も感銘を受けることになる江戸に入ります。そして、英国公使館を拠点に江戸市中・郊外を調査し、非常にたくさんの発見をします。

英国公使館は東禅寺という寺の境内にありましたが、その庭を見た時、「広くはないけれども、私が今までに見た中で、

く、イギリス人が所有するものとしては、最も耐寒性で、有用な外来種の常緑灌木である。この植物は英国の厳冬にも寒害はなく、またロンドンのスモッグの中でも、他の植物よりもよく生育する。だから公園や街の広場やロンドン市民の家の庭にも、どこにでも見られる非常に普遍的な植物の一つである。しかし英国では、私が日本で見たように、この木に深紅色の果実がいっぱい実つているのを見た者は、一人もいない」

当時のロンドンを始めとしてイギリスの都市は、環境の劣悪化に悩んでいました。日本独自の観葉植物、とりわけアオキの収集と栽培の技術を導入するために、彼は特に熱意を示しますが、遂にそれを江戸で発見したのです。

「私は江戸の近傍の森の木蔭で、偶然、日本のアオキの本当の種類を見つけた。もちろん、イギリスの庭にある葉に斑のあるアオキは、その日本種の唯一の変種であることは疑われない。この種のアオキは、つやつやした緑の葉が美しく光つて、冬から春の間にかわいらしい赤い漿果が鈴なりになる。……まことに『日本の西洋ヒイラギ』である」

フォーチュンはこうした発見をイギリスの王立園芸協会(ガーデンニング・園芸の奨励を目的とする慈善団体)に大きな成果としてもたらしました。(つづく)

心惹かれる小規模の庭の一つである」と述べ、カシヤカエデ、ツバキ、ウメ、マツなど様々な植物でおおわれた純日本式の庭園に感動し、「大木が庭の一部に日影をつくるとともに、別の部分には、木の間に洩れた太陽光線が、種々のまじり合った色彩の上に一面に輝いて、誰でも空想の仙境に引きずり込まれるようである」と、その美しさを見事に表現しています。

また、江戸郊外の団子坂や王子、染井村などでたくさん植木屋を見物した様子をこう綴っています。

「どこも植物が豊富で、鉢植えや地植えのものなど、ヨーロッパにも全く新しい品種が多く、非常に興味と価値のあるものが栽培されていた」「染井や団子坂の苗木園のいちじるしい特色は、多彩な葉をもつ観葉植物が豊富にあることだ。ヨーロッパ人の趣味が、変り色の観葉植物と呼ばれる、自然の珍しい斑入りの葉をもつ植物を賞讃し、興味を持つようになったのは、つい数年来のことである。これに反して、私の知る限りでは、日本では千年も前から、この趣味を育てて来たということだ。その結果、日本の観葉植物は、たいいてい変わった形態にして栽培するので、その多くは非常にみごとである」

観葉植物や盆栽が日本人の日常生活に欠かせない存在だったせいか、この時代の日本の園芸文化は世界最高峰であった